縄文式土器・縄文文化の起源について

鎌　木　義　昌

1.　縄文式土器と縄文文化

縄文式土器（時代の変遷によって．その名称は色々と変化して来ている．）と呼ぶ粘土でつくられた焼物をもち，打製あるいは磨製の石器を使用した文化を，私達は一般に縄文文化と呼んでいた．しかし，私達が縄文式土器と呼び，縄文文化と呼んだものは，果して一定不変の概念規定をもった物質であり，文化なのだろうか．私達は縄文文化の研究史をひもといて見て，それに対する否定的な多くの答を見いだす．明治時代に始まる縄文文化の科学的な研究の歴史は，常に縄文式土器が重要な前提となって，この土器の使用された地域と時間のわく内にのみ，縄文文化の名称が使用されて来た事実を教えている．つまり縄文式土器の使用された範囲のみに縄文文化の存在が認められていたわけで，縄文式土器の内容の拡大と伴存遺物あるいはより古い土器群の新らしい発見は，縄文文化の地域・時間の拡大と，その文化概念の変化を生ぜしめることとなる．

縄文式土器乃至縄文文化の概念が不安定ながらも定められたのは明治時代であるが，以後大正年代から昭和10年前後にかけて，縄文式土器・縄文文化に関する概念は，かなり安定したものとなって来ている．この間に縄文式土器を特徴づける外面的な要素として，縄文を持つこと，口縁突起の存在することが大きく取り上げられていた．しかし，この時期においてさえ，すでに各地の縄文式土器と呼ばれる土器群の中に，これらの特徴のわくからはみ出る土器群の存在が知られている．このような縄文式土器らしくない特徴を持った土器群については，その当時としても，日本列島の最古の土器群とは考えられておらず，しかも九州などのような日本列島の端部においてのみ認められる現象とされていた．そのため，日本列島の端部に存在する縄文的な一般的特徴を有しない土器を，日本列島内の縄文式土器との関連においてとらえるより，大陸の土器との関連を考えようとする傾向も存在した．

昭和10年代において明らかにされた撚糸文土器群（註1）は，関東地方という一定の範囲内のみに発見される土器群で，その当時までに明らかにされたどのような土器群よりも古いものであることが，その当時大きくとりあげられた．器面をかざる棒巻縄文（撚糸文）と斜行縄文は縄文式土器の特徴をそなえており，縄文文化の所産であることは明らかである．

その後，昭和20年代から30年代にかけて，撚糸文土器に平行するか或いはそれより古いものとして，西方に強い濃度をもって爪型文土器群が問題視され，東北方的な傾向をもって押圧縄文（或いは縄線文）が注意された．さらにまた，これらいづれの土器群よりも古いものとして，細隆文・微隆文の土器群が，日本列島的な拡がりをもって，各地で発見されるとともに，長崎県福井洞穴（註2）では，それらよりも尚古い要素として隆帯文土器が取り上げられている．

山内清男氏は，これらの土器群のうち撚糸文土器乃至それ以前に編年さるべきものを草創期（註3）として早期より区分し，縄文式土器型式の編年を行なっておられる．この土器群の使用された採集経済段階にあった日本列島の土器文化すべてを，今まで耳なれた縄文文化という名称で総称するのは当を得た方法かもしれぬ．しかしこれらの土器のすべてを，縄文式土器とするかどうかは，さらに検討すべき余地があるのではなかろうか．撚糸文土器群・押圧縄文土器群は明らかに縄文の認められる土器群で，それ以後の土器群との関連性も推定される，しかし，隆帯文・細隆文・微隆文・爪型文などの土器群は，はたして次におとずれる土器群に伝統が残されたかどうかは，今だ充分の検討がなされていない．またこれらの土器群と同じような土器群が，日本列島の周辺に存在するかしないかの検討も殆んど行なわれていない現状と云わざるを得ない．もし周辺に同じ土器群が存在するなら，縄文式土器とするより，別の土器として取扱う方が妥当のようである．つまり，この場合に縄文式土器の誕生は，押圧縄文・撚糸文土器の誕生の時点に立って論述すべきであろう．

2.　初期の土器と縄文文化

以上，私は日本列島の最初の土器群の誕生と縄文式土器の誕生が，必ずしも一致するとは限らない可能性を述べたが，同じ意味で，縄文文化の誕生が，縄文式土器の誕生と必ずしも一致しないでも良いと

いう可能性をも述べたこととなる.

以前私は，洞穴の資料などを基礎として，非縄文文化的な九州の細石刃文化の中に，日本最古の土器群が存在した事実を述べ，これらの土器が縄文式土器の起源にはつながる可能性を述べながらも，この土器文化の誕生は縄文文化の誕生とは直接には結びつかない可能性を指摘した（註4）．これは，隆帯文土器以後にあらわれた本州の土器群に，細石刃が無く，しかも，さらにその後の縄文石器と関連の持たれる石器を保有する事実を重視したもので，この点，前項で日本列島最古の土器文化を縄文文化とする妥当性を述べながらも，九州の一角にのみ存在した可能性のある細石刃文化については非縄文文化的なものといまだに考えざるを得ない.

日本列島最古の土器あるいは縄文式土器はどのように誕生したか，また日本列島最古の土器文化あるいは縄文文化はどのような状態で誕生したかを考察するためには，前述のような語句の概念設定の上に始められるべきものであろう.

その点，古くから問題とされて来た縄文式土器・縄文文化の起源論は，前述の如き操作を行なわない限り，日本列島における土器あるいは土器文化の起源論として取扱わねばなるまい.

つまり明治時代以来くり返されて来た縄文文化起源論は，最古の土器が常に一定の特徴に支えられた縄文式土器であり，それにともなう文化内容が，一貫性のある文化である限り問題がなかったわけで．最近における爪型文土器・細隆文土器・隆帯文土器・細石刃文化の研究などがこの問題を複雑化す原因となったとも云える．この複雑化する原因となった土器群やその文化内容などについてすこし述べておこう.

現在判明している限り，日本列島最古の土器とそれにともなう文化は，隆帯文土器文化と云える．これは長崎県北松浦郡吉井町福井洞穴3層下半から検出されたもので，幅広い粘土帯を主な文様とし器壁に繊維の混入が認められる角張った平底の土器と，黒耀石製細石刃核・細石刃が共存している文化である．その他サスカイト製半円形のスクレイパーもともなっている．このような共存関係のみられる遺跡は今のところ福井洞穴以外からは発見されていない.

次に編年さるべき土器・土器文化は福井洞穴2層下半3層上半で検出された細隆文土器文化である．細い隆線文を主な文様要素とする器壁に繊維のみられる角張った平底の土器と，黒耀石製細石刃核・細石刃・サヌカイト製半円形スクレイパーが主な文化遺物で，砂岩製あるいは土製の有孔円盤が若干発見されている．福井洞穴以外では，このような組み合せは，やはり知られていない.

九州以外で発見される細隆文土器遺跡は，愛媛県上黒岩岩蔭・広島県馬渡岩蔭（細隆文土器は無いが，それに共存すると考えられる無文・平底の繊維混入ある土器出土）・岐阜県九合洞穴・長野県柳又遺跡・荷取洞穴・石小屋洞穴・新潟県小瀬が沢洞穴・埼玉県橋立岩蔭・山形県日向岩蔭・火箱岩岩蔭・一ノ沢岩蔭など日本列島各地にかなり広く分布し，新らしくなると土器の細隆文が微隆文に変るようである．これらの土器にともなう石器としては，有舌尖頭器・尖頭器，石鏃などがおもなもので，上黒岩岩蔭では他に類例の無い線刻礫も発見されている．これらの遺物中石鏃の顕著に認められる点は北九州の文化と大きく相異する点で，以後の縄文文化の石鏃と対比して興味深い.

これに次ぐものとして爪型文土器とその文化が西日本的なものとして知られている．長崎県福井洞穴2層上半では薄い爪型文土器にともなって黒耀石製細石刃核・細石刃・サヌカイト製半円形スクレイパーが発見さている．最近同様の出土例が南九州鹿児島県出水市上場遺跡にも知られている（註5）.

また古くから問題とされていた長野県曽根湖底を始め岐阜県桃ノ湖遺跡・新潟県小瀬が沢洞穴・長野県石小屋洞穴・群馬県西鹿田，埼玉県西谷遺跡などからは爪型文土器が発見されており，石鏃が共通に伴存し，有舌尖頭器・スクレイパーの出土例も報告されている．これらの伴存物がいづれも福井例と相異していることは注意しなければならない.

中部地方より東北地方にかけて押圧縄文土器の文化が知られている．群馬県西鹿田遺跡・埼玉県西谷遺跡・栃木県大谷岩蔭・新潟県本ノ木遺跡・室谷洞穴・小瀬が沢洞穴・長野県石小屋遺跡・山形県一ノ沢遺跡などが著名である．しかしこれらの土器にともなう伴出石器については，色々問題が多い．山内清男氏は本ノ木遺跡について，多量の石槍と植刃と考えられる石器が土器と共存したと考えているが，発掘者の一人である芹澤長介氏は，これらの伴出は二次的推積の結果であると考えている（註6）．永峯光一氏は長野県石小屋遺跡について植刃の出土を述べているが石槍については触れていない（註7）．また新潟県小瀬が沢洞穴では石槍と植刃の出土が記録されておる（註8）．室谷洞穴では三角形石鏃が伴出

しており，尖頭器の出土がない．また，西鹿田・西谷・大谷からは尖頭器の伴出例が認められていない．このように眺めてみると有舌尖頭器など，尖頭器の伴出の著るしさが報告されているのは，本の木と小瀬が沢で，その他の遺跡は，尖頭器の伴出が見られない．このような点を中心に山内清男氏と芹澤長介氏の見解が大きく相異しているわけである．

関東地方を中心として発見される撚糸文土器には石鏃の伴出があまり聞かれない．自然の礫の一端に加工を加えた局部打製・磨製石器が一般に知られている．

このような幾つかの土器文化を経過した後，日本列島内は中部以西の押型文土器圏と関東以北の貝殻文・沈線文土器圏とに二分される．

西部の押型文土器にともなう石器としては，剝片を利用したスクレイパー状の石器と石鏃がもっとも多量に認められる石器で，土器形態・装飾，石器などに，縄文式土器・縄文文化との共通の要素が数多く知られている．

また北日本の貝殻文，沈線文土器にともなう石器も，尖頭器・石斧・石鏃・石篦など，それ以後の縄文文化に一般的な要素を数多く含んでいるし，土器そのものの変遷も，すでに縄文式土器としての歩みが始まった感が深い．

つまり，すくなくとも押型文土器や貝殻文・沈線文土器は明らかに縄文式土器であり，この時代の文化は確実に縄文文化であったわけである．

以上簡単に日本列島最古の土器文化と土器群の姿にふれてみたが，今度は，このような土器文化直前の土器の無い文化の概要について少し触れてみよう．

福井洞穴の4層からは，黒曜石製の細石刃核と細石刃・サヌカイト製尖頭器・サヌカイト製半円形のスクレイパーが出土している．この遺跡に関する限り，このような石器文化が土器文化直前の姿であったと云える．また芹澤長介氏の研究によれば（註9），瀬戸内から東北地方南部にかけて存在する有舌尖頭器をともなう文化には，土器をともなうものとともなわないものがあり，前者が新らしく後者が古く編年されるとしている．私もかって，細隆文土器をともなう細石刃文化と有舌尖頭器の文化，それに先行する隆帯文土器文化乃至土器をともなわない有舌尖頭器文化のそれぞれが，地域を異にして平行することを述べた(註10)．芹澤氏の論旨は，このような推定を，さらに詳細に石器の形態などから論じたもので，この考察はほぼ確実なものと考えて良いだろう．

日本列島の土器文化直前の無土器文化には，以上のべたように有舌尖頭器を主体とするものと細石刃核・細石刃を主とするものと二つの文化が知られている．この二つの文化のいづれを古く考えるかについては，瀬戸内地区から中部山岳地帯にかけての事実に目を向ける必要があろう．これらの地区では同一地域内に土器を持たない細石刃文化と土器を持たない有舌尖頭器の文化が知られている．この同じ地区内にある土器を持たない細石刃文化（原則として半円錐形の細石刃核をもっている.）を土器を持った尖頭器文化以後に編年することは不可能で，土器を持ってない文化と云う意味で，関連ある二つの有舌尖頭器文化より古く編年すべきである．また，福井洞穴で発見される土器を持たない細石刃核は半円錐形の形態をもって居り，形態的に瀬戸内・中部地方の半円錐形細石刃核に類似している．この種の細石刃文化が，福井遺跡では，隆帯文土器文化より古く編年されるということはまた，中部地方の半円錐形細石刃核を，隆帯文土器と平行関係にあるとされる土器のない有舌尖頭器より，古く編年すべき別の根拠ともなり得るだろう．このような実情から，半円錐形細石刃核以降の文化・石器の変遷の姿を眺めてみよう．

まづ半円錐形細石刃核の出土地を西から眺めれば，福井洞穴4層を始めとし．遠目遺跡・野岳遺跡などのある長崎県と唐津市周辺を中心とする佐賀県が重点的に知られており，瀬戸内沿岸では岡山県出崎遺跡・大阪府岡山遺跡を主とする各地，三重県では志摩半島を中心に，静岡県では磐田市を中心とする各地に，また長野県では矢出川遺跡を代表とする各地などに相当量の出土例が知られている．これらの各遺跡では，いづれも土器の伴出は無く，中部地方以西はほぼ一様の文化圏にあったと考えて良いだろう．

関東地方から東北地方にかけて，この文化に平行する無土器文化はいまだ明らかにされていない．あるいはより古い石器文化の伝統がそのまま残されていたのかものれない．

北海道には土器を持たない細石刃文化が幾つか知られている．しかしこれらの文化が本州の細石刃文化とどのように関連するかは不明である．

本州で発見される土器を持たぬ細石刃文化はこの時期をもってほぼ終末をとげるようで，瀬戸内沿岸の岡山県鷲羽山遺跡，香川県井島遺跡などに半截された形の舟底型類似の細石刃核が散見されるのは，その伝統が特定地域に一部残されたものと解すべき

である．

長崎県福井洞穴によれば，この石器文化に次いで3層下半の舟底型細石刃核十隆帯土器文化がある．この隆帯文土器に対比すべき土器は本洲では未だ発見されて居らず，舟底型細石核の出土も殆んど知られていない．それに代るべきものとして，前述の土器を持たない有舌尖頭器が考えられる．この有舌尖頭器は若干の例を除いて九州からは未発見で，瀬戸内から中部に向って濃厚となり，その北限は東北地方南部となっている．この種の土器をともなわない有舌尖頭器が，長崎県福井洞穴3層下半の隆帯文土器文化と平行する本洲の文化であった可能性が強い．

関東地方太平岸から東北地方北部にかけては有舌尖頭器の出土がほとんど報じられていない．このような状況を人間の稀薄と解するか，あろいは古い石器群の伝統が残存したものとするかについては，今後の調査をまたねばなるまい．

北海道には土器を持たない有舌尖頭器が知られている．芹澤氏によれば，これらのものは本州の古い有舌尖頭器に類似するようで，日本海岸沿いに，東北地方南半の有舌尖頭器に結び付くのかも知れない．

これに次いで，東北地方南半以西の地域に細隆文土器文化が見られるのであるが，これは前に述べたので，図1から図3に至る変遷を参考にしていただきたい．

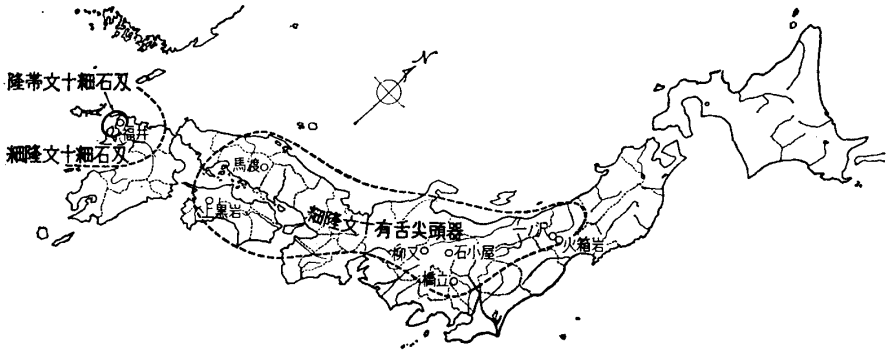

図1　隆線文土器の分布（隆帯文・細隆文・微隆文）

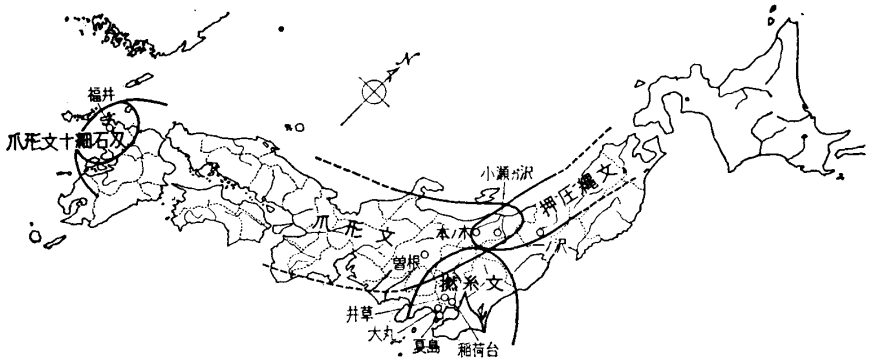

図2　爪形文土器・押圧縄文土器・撚糸土器の分布

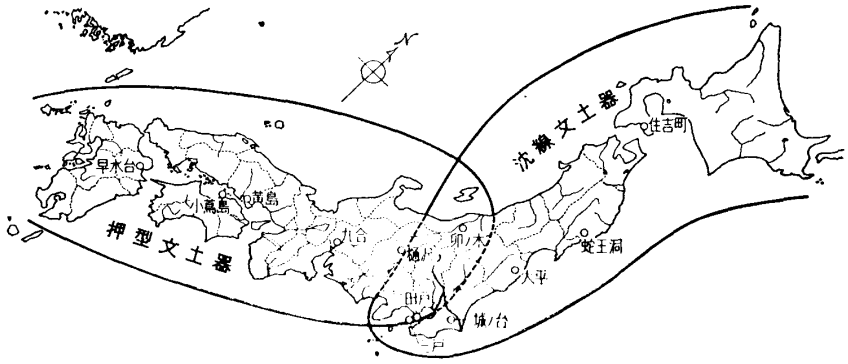

図3　押型文土器・沈線文土器の分布

3.　周辺文化について

ここで周辺にある関連文化を眺めてみよう．中国の東北地区から蒙古にかけては，古くから細石刃核・細石刃などの発見される地域として有名だった．しかしこれらの資料の多くは採集品で，京大，東大などに保存されている資料の多くも，それらの域を出るものはあまり知られていない．その多くは採集された当時から，土器や石鏃などをともなう文化であると解釈されており，土器をともなわない文化とする傾向は薄かったわけである．しかし，中国の土木関発の進歩につれて，黄河流域の沙苑から土器をともなわない細石刃文化が発見され，中国東北地区などの細石刃文化にも，土器をともなわない文化があるのではないかという疑問が呈出された．このような細石刃文化はアジアの東北地区では，かなり濃密に遺跡を残しており，前述の中国以外に，

シベリヤの東部からアリューシヤン，アメリカ大陸北部のアラスカ，カナダにまでその遺跡が知られている．日本列島各地に残されている細石刃文化も，それが土器をともなうかともなわないかは別問題として，これら周辺文化との関連のもとに考えて行かねばならぬわけである，

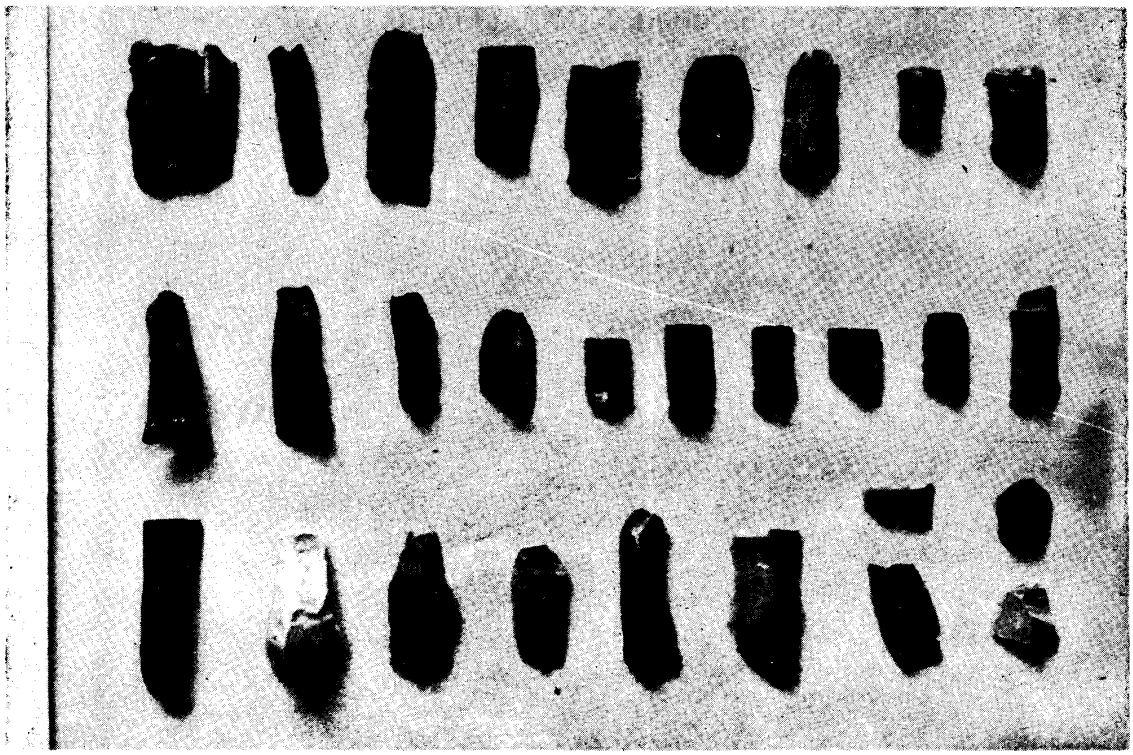

図4　オロス貝塚の細石刃（東大文学部蔵）

図4　オロス貝塚の有孔円盤と骨角器（東大文学部蔵）

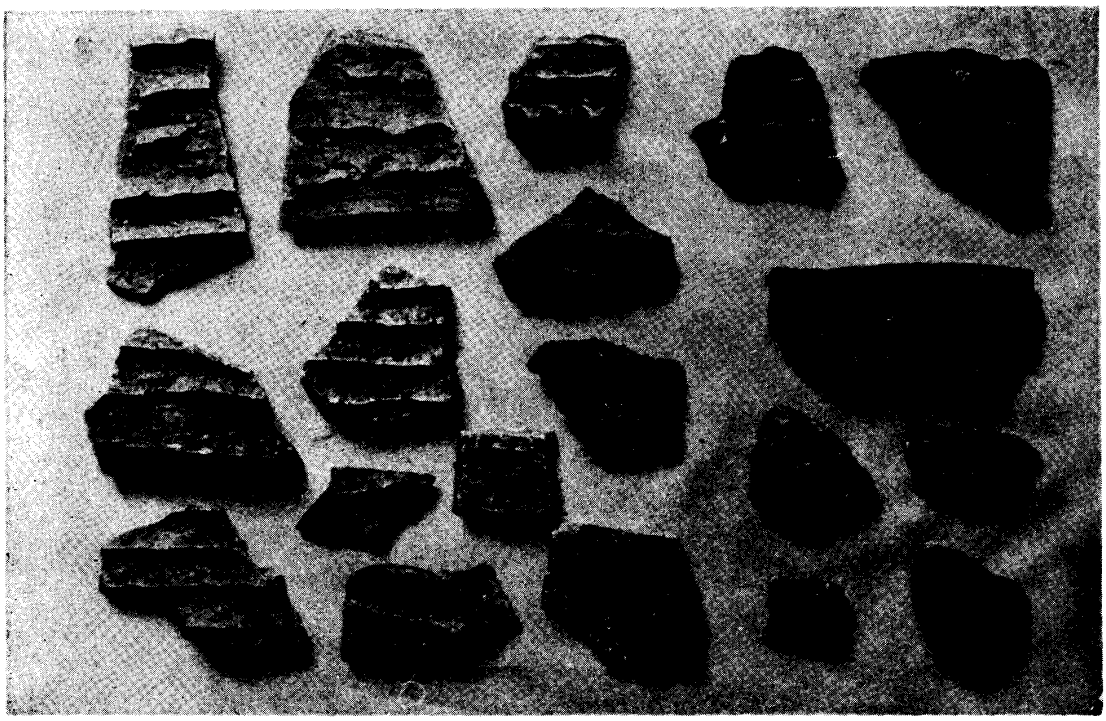

図4 オロス貝塚の隆線文土器（東大文学部蔵）

古い東大の資料中に，中国東北地区オロス貝塚（註11）から発見された資料が知られている．この資料中には，福井洞穴2層下半・3層上半から出土する細隆文土器に類似する平底の隆線文土器を出土しており，また有孔土製円盤なども知られている．これに伴存する石器としては細石刃・石刃鏃・磨製石斧があり，骨角器なども出土している．このオロス貝塚については新石器時代末期という考と，新石器時代初期という考察が対立しているが，伴出石器から見て新石器時代初期と考える方が妥当のようである．この資料と福井洞穴の細隆文土器文化を直接対比することは，中国のこの種遺跡の研究が進んでいない現在では，やや行過ぎの感もあるが，石刃鏃・磨製石斧を除けば，かなりの共通点を認めないわけにはゆかない．中国東北地区において，隆線文土器を出土する遺跡を私達はあまり知らないが，あるいはこの地区において隆線文土器文化がかなり古くから認められるのではあるまいか．

芹澤長介氏によれば（註12），「伊東信雄氏によって樺太最古の土器と考えられた隆線文をもち角底である宗仁式土器には，片刃の局部磨製石斧・石刃・有舌尖頭器が伴出している」由である．同氏によれば，「このような石器の組成は，土器を持たない北海道のモサンル遺跡とほぼ同じであり，モサンル遺跡の石器組成はさらに新潟県小瀬が沢・長野県御子柴などに近似しているので，おそらく沖積世初頭の遺跡と見てよいだろう」としている．同氏はさらにこの見解を進め，「したがって角底と陸線文によって特徴づけられる宗仁式土器は，すくなくとも北海道の早期縄文式土器よりも古いと考えられ，その年代は，カーボン・デイテイングによれば前5,000年あるいはそれ以前ということになる．当時の樺太は大陸の一部であったと推定されているので，宗仁式土器は大陸がわの土器とかんがえてもさしつかえない．」としている．ここで注意しなければならないのは，これらの文化に有舌尖頭器がともなうことと，隆線文土器をともなうものがある点である．同じように隆線文土器をともないながら，オロス貝塚における石器の組成と宗仁式土器にともなう石器組成に差異があることも，さらに注意しなければならぬ事実である．

4. 総 括

以上のように，縄文文化の起源・縄文式土器の起源・日本列島の土器の起源などにせまる幾つかの基礎材料を列記してみた．このような材料の中から，前記した問題を考えてみよう．

縄文文化の起源を考える場合，先づ前提として取上げておかなければならぬ問題がある．それは先づ，縄文文化の祖源となったものと，誕生した縄文文化

図5　福井洞穴の土器
下段右2個　隆帯文土器
下段左2個　細隆文土器
上段右2個　押型文土器
上段左11個　爪型文土器

をどのような形で理解し表現するかの問題である．この点について，より具体的に云うなら，第一として縄文文化の祖源となった文化が，たとえ土器を持たない文化であったとしても，誕生した縄文文化はあくまで土器を持った文化に限定すべきではなかろうかということである．それから第二として，土器を持った文化が祖源なら祖源となった文化の具体的内容（土器の特徴あるいは他の文化遺物の特徴）が，誕生した縄文文化の中にあまり伝統として残されていない場合，祖源となった文化を縄文文化の中に入れるべきではないのではないかということである．

それとともに縄文式土器の起源を考える場合にも，縄文式土器の祖源となった土器と，誕生した縄文式土器との関係をどのような形で理解し表現するかの問題がある．日本列島という一定地域内で，他からの土器製作という刺戟なしに自生した土器の場合，たとえその後の縄文式土器の中に特徴が伝統的に残されていなくても，それは縄文式土器の誕生という形で表現すべきではなかろうか，というのが一つである．第二に日本列島の周辺にある土器が日本列島に導入され（土器作りの技術が導入され，周辺の土器と同じものが作られた場合もふくめて），その刺戟によって縄文式土器の特徴をもった土器が誕生した場合，祖源となった土器を縄文式土器として取扱うかどうかを検討すべきではなかろうか，ということである．此の点に関して私は，祖源となった土器の伝統が縄文式土器の中に殆んど残されていない場合は，縄文式土器のわくからはずして，日本列島周辺の土器型式とするのが妥当であると考えており，もしその伝統が強く残されているなら，この祖源的なとした土器は縄文式土器として取り扱い，このような土器を生み出したそれ以前の土器に，縄文式土器の祖源を求めるべきであると考えている．

もとへもどって，現在判明している限り，日本列

島最古と考えられる土器および土器文化を眺めてみよう．長崎県福井洞穴3層下半の隆帯文土器は，細隆文土器に先行する日本列島最古の土器と考えている．これと同じ土器は今のところ日本列島の何処にも発見されていない．この土器は細石刃・細石刃核と共存し，細石刃文化の所産とされている．この土器の使用された頃，日本列島の他の場所では一体どのような文化が存在したのだろうか．現在の推定では，半円錐形細石刃核使用以後の文化は，先づ土器を持たぬ有舌尖頭器の文化とされている．その後に来る有舌尖頭器十細隆文文化は，西北九州の細石刃十細隆文の文化に対比されており，福井洞穴3層下半の細石刃文化に平行する本州の文化は土器を持たぬ有舌尖頭器の文化であると私は考えている．これら二つの文化が日本列島内でどのようにして生れたのだろうか．

福井洞穴4層の半円錐形細石刃核を持った文化は，かなりの共通性をもって中部地方以西の地域および北海道に拡がっている．これらもののが，東亜から北米に拡がる細石刃文化と無縁のものであるとは考えられない．日本列島に存在する細石刃文化のみを個立させ，日本列島独自の発生とすることが果して可能であろうか．私はそのような考を否定する．福井洞穴3層下半の土器を持った細石刃文化はこれに引き続く時期で，両者の間に密接な関係があったことは疑い得ない．福井4層文化が大陸の細石刃文化と密接な関係を保っていたとするなら，3層下半の細石刃文化と大陸の細石刃文化との結びつきも充分可能である筈だ．西北九州と南九州の一角に細石刃文化の伝統が比較的長く残されることも，この九州の一角が大陸の細石刃文化と，他の地域以上密接な関係を保ち得た根拠とはならぬだろうか．

日本列島の縄文文化の中に，細石刃文化の伝統が殆んど認められないということは、大陸との結び付きが薄かったか，あるいは薄くなったことを物語っている．

福井3層下半の細石刃文化が大陸の細石刃文化と密接な関係を保っていたとするなら，この文化にともなう隆帯文の源流は大陸に存在するか，あるいは自生したものとしなければならない．前項で中国東北地区のオロス貝塚にみとめられた隆線文土器について記したが，この隆線文は福井2層下・3層上半の細隆文土器には類似するが，隆帯文土器とは若干違った様相を示している．その点でオロス貝塚の示す文化内容とは直接には結びつかない．しかし，このオロス貝塚の示す様相は，これら地域に隆線文系の土器文化が現実に存在した事実を示している．その点，中国東北地区では，将来，隆線文系土器文化の編年が可能となるのではあるまいか．現在では，福井の隆帯文土器は大陸で発見されていないが，同じ

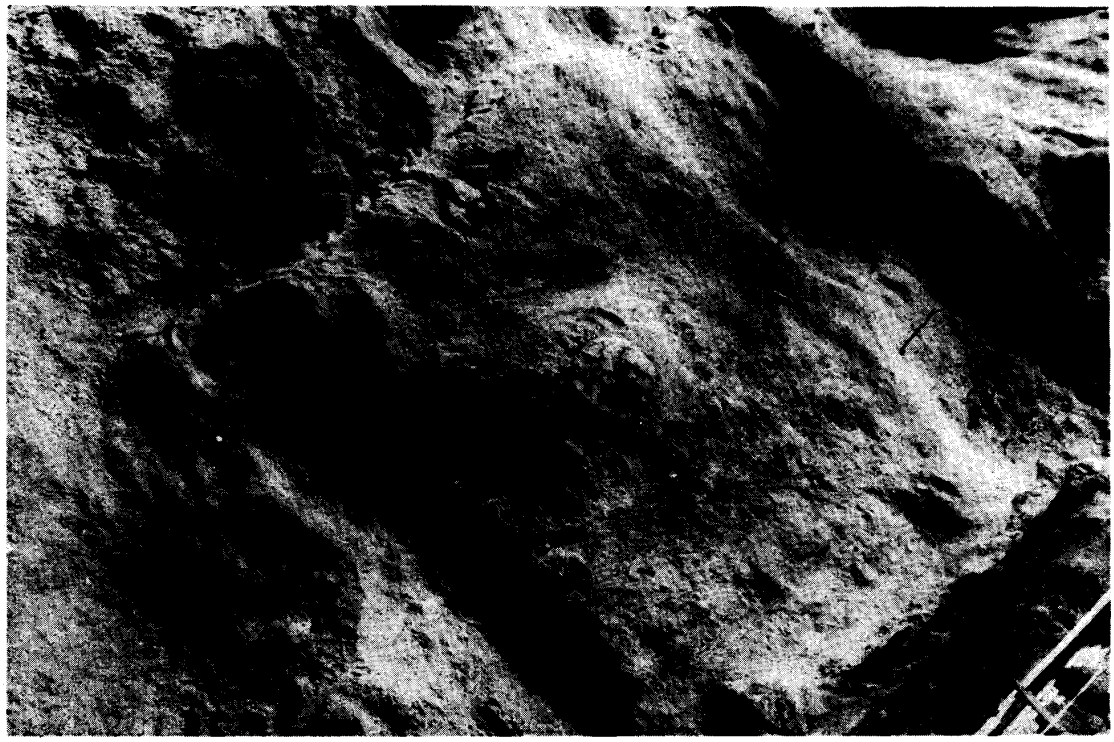

図6　福井洞穴有孔円盤出土状況

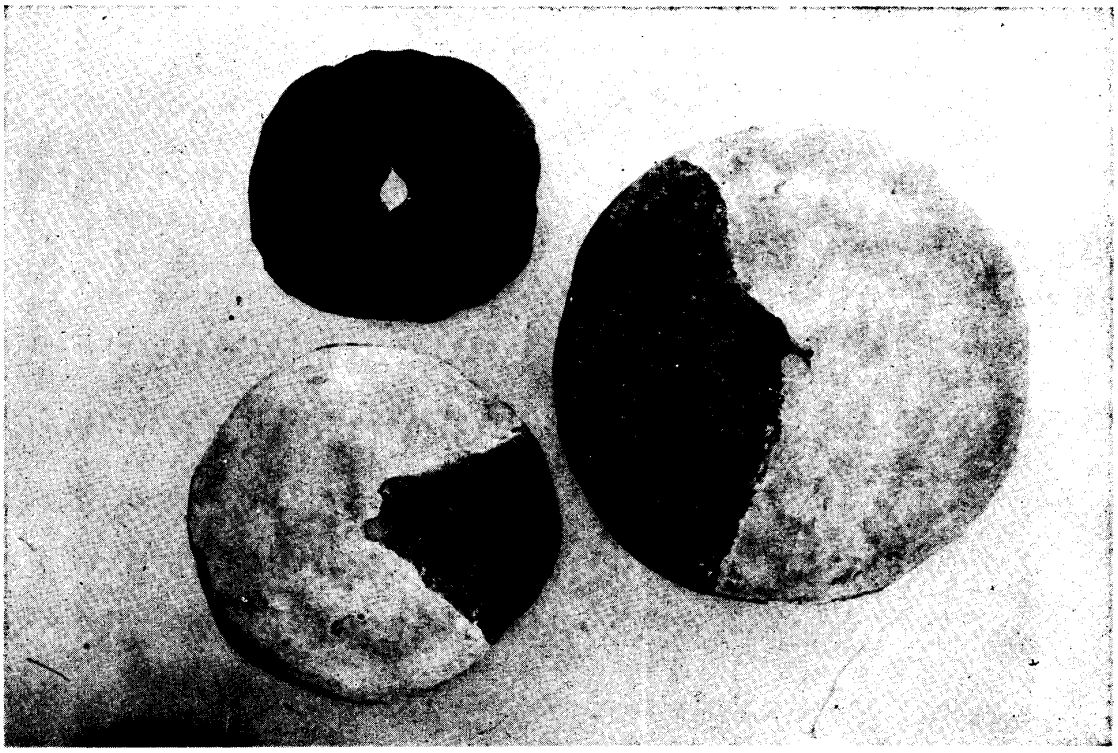

図7　福井洞穴有孔円盤

細石刃文化の一環として発見される可能性がかなり強いものと考えている．福井の隆帯文土器を見ると，時として，横走する隆帯と隆帯の間を縦走する細隆線で結びつけているものを発見する．この細隆線が福井2層下半・3層上半の細隆文に変化するようであり，更に進むと微隆線に進む傾向が認められる．オロス貝塚にある細隆文の先駆として，幅広い隆帯が存在したのではあるまいか．

つまり，この隆帯文土器は中国に端を発する非縄文式土器である可能性が強く，生産具としての細石刃が縄文文化に伝統を残さぬという意味で，縄文文化とは別の文化とする方が妥当なようである．またそのような意味で，日本に生れ出た土器の起源は中国大陸にある可能性が非常に強い．

次に土器を持たぬ有舌尖頭器の文化を考えてみよう．この有舌尖頭器は早期中葉以後の縄文文化には，その姿を残さぬ石器で，その点，非縄文文化的石器と云える．このような石器がどのような形であらわれたかは明らかで無いが，半円錐形石核の使用された地域ではそれ以後にあらわれた石

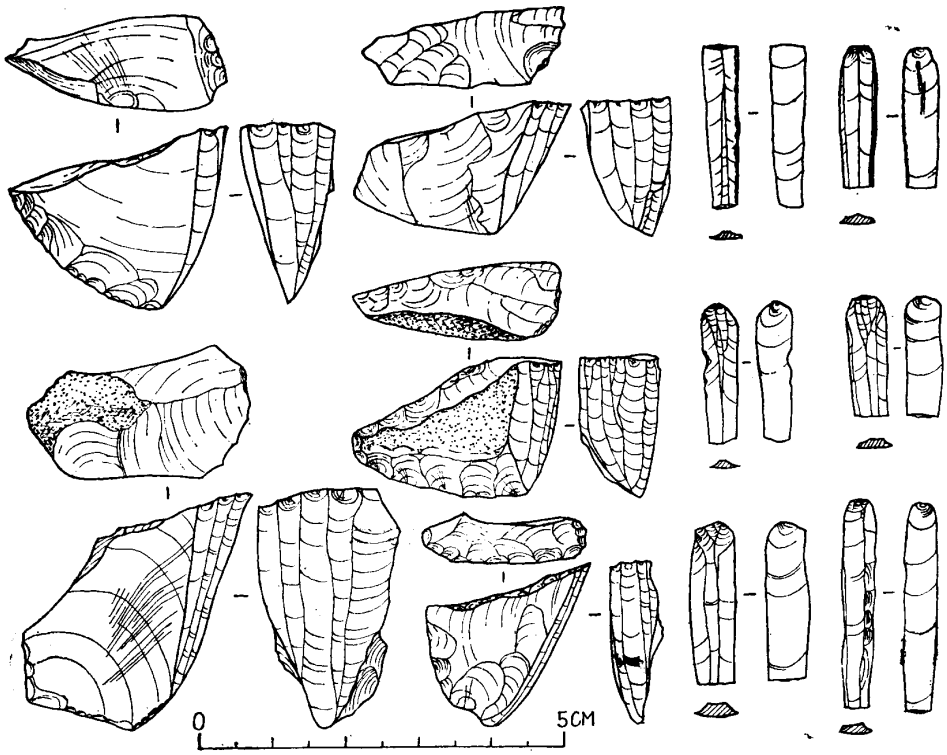

図8　福井洞穴，土器をともなう細石刃核と細石刃

器であることはほぼ明らかで，中部地方から裏日本に分布の中心があるようである．前項で芹澤氏などの宗仁式土器についての考察を記しておいたが，この土器には有舌尖頭器を伴出しており，この土器文化を大陸の文化として取扱っている．また，この文化にともなう石器の組成と土器をともなわない北海道モサンル遺跡・新潟県小瀬が沢・長野県御子柴などの石器組成とが近似している事実を述べている．とするなら，あるいは有舌尖頭器を主体とする文化が大陸の側に存在したかも知れない．そのような問題を別としても，この有舌尖頭器の文化は，福井の隆帯文土器の時期に，東日本から西日本にかけての拡がりを持っていたことが推定される．

福井2層下半・3層上半の文化は細隆文十細石刃の文化である．細石刃の文化であるという意味で縄文文化とは云い難い．これらの土器を福井洞穴の隆帯文土器が自然に変化したものとするかあるいは大陸で変化したものとするか，あるいは大陸で変化した土器が時間をおいて訪れたとするかは決し難いが，その伝統が残されていないという意味で，やはり縄文式土器とはなし難い．

これとほぼ同じ頃，中・四国以東東北南半までの地区では細隆文土器十尖頭器十石鏃の文化が知られている．ここに見られる細隆文土器は，果して，九州の細隆文土器の影響なのだろうか．あろいは，宗仁式土器の前駆をなす土器が有舌尖頭器と結びついて，これら地域の文化を作りあげたのだろうか．この問題はなかなか決し難く，現在細隆文土器という一様の名前で呼んでいる土器の再検討がなされなければ，なかなか解決のつかぬ問題と云わざるを得ない．しかし一応西の影響による細隆文土器と有舌尖頭器の結び付きを考えた場合でも，この土器文化を縄文文化と呼ぶかどうかという大きい問題がある．細隆文土器自体は以後の縄文式土器に伝統が認められないとしても，この文化自体を非縄文文化とするのは尚早である．有舌尖頭器は別として，各地で発見される石鏃はその後縄文文化の代表的石器となったもので，石鏃をもった文化は，その後の縄文人の生活と分離し難い性格を持っていたのではあるまいか．そのような意味でこの文化をもって縄文文化の誕生とするなら，土器を持たない有舌尖頭器の文化や，隆帯文・細隆文をもつ細石刃文化は縄文文化の祖源文化と呼ぶべきだろう．

これを，北方から入った細隆文十有舌尖頭器十石鏃の文化とするなら，いまだ縄文文化の誕生とすることは尚早であろう．

やがて西北九州では，爪型文土器十細石刃の文化が始まる，この地域では依然として細石刃文化が残されており，縄文文化とは云い難い．爪型文土器自体も，それ以後の土器に伝統が残されたとは考えられないので，縄文式土器とは云い難い．

しかし，この時期と推定される中部地方以西の爪型文土器には有舌尖頭器の痕跡は薄く，石鏃が極めて重要な石器となっている．此の点，文化自体はそれ以前に引き続いて，縄文文化としての進展が始まっているものと考えないわけにはゆかない．しかし爪型文土器は依然として，以後の縄文式土器とは別個のものとして取扱う必要があるだろう．

これらに平行すると考えられる押圧縄文土器，撚糸文土器は，その特徴が以後の縄文式土器と関係が保たれており，正確な意味における縄文式土器の誕生として取り扱える．

東北地方南半的な押圧縄文土器・関東地方的な撚糸文土器をもって縄文式土器の正確な誕生とした場合，それらの土器を生み出した祖源的な土器は一体，どのような土器なのだろうか．これらの土器直前であることのほぼ確実な土器は細隆文土器であるが，この細隆文土器が自然に発達した場合，果してこのような土器が生れるだろうか．縄を廻転させ，突起をつける技術(之は少し後だが)を自然発生的なものとしない限り，このような特徴をもった祖源的な土器を再たび周辺の地区で探し求めなければならない．

以上，縄文式土器の起源，縄文文化の起源について，私の疑問を取りまとめるとともに，若干の材料を使用して，私の推察を記してみた．

私の推察の結論を最後にとりまとめると，日本に於ける最古の土器および土器文化の誕生は福井洞穴3層下半の隆帯文土器およびそれをもった細石刃文化であり，この土器文化の祖源は中国大陸にある細石刃文化だろうということが一つ．

第二に縄文文化の誕生は本州にある細隆文土器十石鏃十有舌尖頭器の文化をもってあてうるだろう．しかし土器は未だ縄文式土器とは云えない．このような文化の祖源的文化は土器を持たない有舌尖頭器の文化や九州の隆帯文土器をもった細石刃文化と云うべきである．

第三に縄文式土器の誕生は押圧縄文土器・撚糸文土器からとすべきであり，爪型文土器は縄文式土器とすべきではないだろう．また細隆文土器がそれらの土器の本当の意味での祖源であったかどうかは疑わしい，などである．

5. 最後に

以上，縄文式土器・縄文文化の起源に対する私の疑問を取り出してみた．

私の疑問とは，縄文式土器・縄文文化の起源という問題については，その語句の定義の検討と，語句のこまかな分析から再検討されなければならぬ時期が，すでにおとづれているのではないかという疑問である．

そのため，起源という語句は，祖源的なものと誕生したものとに分類し，日本列島における土器の起源・土器文化の起源と，縄文式土器の起源・縄文文化の起源を別の角度で眺めてみようとした．また，縄文式土器と縄文文化との関係について，何時如何なる場合にも結びつけなければならぬと云う考え方に対して，検討しなければならぬ問題があるのではないかという疑問を呈出しておいた．

今後，以上の疑問の上にたって考えを進めてみたいと思っている．

(註)

1. 江坂輝弥「稲荷台文化の研究古代文化」13—8 (昭17)
2. 鎌木義昌 芹澤長介「長崎県福井層陰遺跡」日本考古学協会第26回総会研究発表要旨 (昭35)
3. 山内清男「縄文式文化」日本原始美術 1 (昭39)
4. 10. 鎌木義昌「縄文文化の概観」日本の考古学 2 縄文文化 (昭40)
5. 池水寛治氏教示による．
6. 9. 芹澤長介「新潟県中林遺跡における有舌尖頭器の研究」日本文化研究所研究報告 2 (昭41)
7. 長峯光一「中部地方の縄文文化」日本の考古学 2 縄文文化 (昭40)
8. 中村孝三郎「小瀬が沢洞窟」長岡市立科学博物館研究調査報告 3 (昭35)
11. 東京大学「考古図編」17 (昭34)
12. 芹澤長介「縄文文化と周辺文化の関係」日本の考古学 2 縄文文化 (昭40)